

前回に続き、今回も家計経済研究所の久木元真吾次席研究員に、職業選択の状況やその方策、あるいは学生支援のポイントなどをお聞きしました。

「選択肢が多い」とは「概には言えない」

「今の若者は仕事を選ぶときに選択肢が多く迷う」と言われることがありますが、そうなのでしょうか。

「選択肢が多いから迷う」という面もあるかもしれませんが、その表現ですと、「学生にとって、豊富なメニューから自由に何でも選べる環境が整っている」と聞こえてしまいます。しかし景気が回復基調にあるとしても、まだまだ多くの学生にとっては、条件が十分に整った仕事は自由に選べる状況にはなっていないと思います。限られた中で選ばざるを得ないから迷う」とい

るをえないからこそ、一層迷うという学生も少なくないのではないのでしょうか。

実際に動いていけばめぐりあう機会も多くなる

職業を選択するにあたって、久木さんが考えている良い方策は何かありますか。

自分の将来の職業や仕事について考えることは、大切であり必要なことですが、同時に、仕事に関わる具体的な経験を重ねていくことも重要でしょう。

「やりたいこと」や「納得できる仕事」は、「出くわす」もの、「気がつく」というようになっていくのだと思います。実際に仕事や他の活動をする中で、新しい人に出会ったり、思わぬ展開に巻き込まれたりしながら、徐々に、あるいは偶然に気づいていくものではないでしょうか。

キャリア教育に乗り切れない学生の存在

個別のコミュニケーションをとれることが大事

残念ながら、日本の場合、正規雇用でないと豊富な機会になかなか恵まれないという面がまだあります。契約社員やアルバイトなどであっても、多様な機会を享受できるような社会のあり方を構想する必要があると感じています。

キャリア教育などに乗り切れない学生のフォローを

以前と比べた大学では、キャリア教育や就職支援に力を割いてい



ますが、その点はどう評価されますか。

従来に比べて、多くの大学でキャリア教育は充実していますし、インターンシップなどを通じて貴重な経験をしている学生も増えているでしょう。ただその一方で、その波に乗り切れない学生がいることにも注意を払う必要があります。いわば「華やか」に就職活動をしている他の学生を見て、「そこまでではないな」と気圧されてしまい、就職全般への意欲が薄れてしまう例もあるように思います。そうした学生に対して、本人たちの責任だと決めつけずに、うまくニーズを汲み取り対応していくことが求められていると思います。

個別のコミュニケーションがとれている感覚

学生への支援について何かお考えはありますか。

私も大学で教えることもあり、その限られた経験の中で気をつけていることがあります。それは、大教室の講義であっても、個々の学生との間にコミュニケーションの回路を保つこと、学生からのメッセージに耳を傾ける用意がある教員だと認識してもらうことです。

私の講義では、毎回学生に提出物を課しています。学生の理解度の把握や出席管理という目的の他に、学生から質問や要望がある場合はその提出物に記入してもらっています。そして、実際に学生が質問や要望を書いたときには、必ず何らかの返答をするようにしています。

返答の内容はシンプルでも、学生からのメッセージに必ず反応をすることで、何かを伝えればちゃんと受け止め答えてくれると思われるように努めています。

その積み重ねによって、学生の信頼感が高まるだけでなく、講義内容の理解も深まり、当初は落ちこぼれそうだった学生も最後までついていくことができたと感じる経験を、私は何度もしています。

“白石さん”現象の本質と通じる

以上の話は、昨年話題になった『生協の白石さん』にも通じると思います。白石さんについては、学生に対する答え方のうまさやセンスが目立ちますが、実はそれと同じくらいに大きかったのは、学生のとりとめもない質問に対しても、さりげなく、でもきちんと答えてきたことだと思えます。答えのうまさに加えて、そうした誠実な態度こそが学生の支持につながったのではないのでしょうか。

教員と学生のコミュニケーションは簡単ではなく、教員が押し付けがましくてもいけませんし、個々の学生に分け隔てなく対応することも必要です。その上で、教員の側で学生と個人的なコミュニケーションができる回路を保ち、学生からの言葉に對してきちんと反応を返すことを地道に続けることは、小さなことですが、大きな意味があるのではないのでしょうか。

久木元真吾 SHINGO KUKIMOTO

(財)家計経済研究所次席研究員。1970年生まれ。東京大学総合文化研究科博士課程単位取得退学。日本学術振興会特別研究員を経て01年から現職。

